

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごしょ

四条金吾殿御書

新版

1513

ς

1515

しじょうきんごのじょ

四条金吾殿御書

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

しじょうきんご

文永 8年

('71) 7月 12日

5歳

四条金吾

ゆき

雪のごとく白く候。白米一斗、古酒のごとく候。油一筒、

御布施一貫文、わざと使者をもつて盆料送り給び候。

おんふせいつかんもん

こと おんもん おもむきあ

がた

おぼ そうろう

殊に御文の趣。有り難く、あわれに覚え候。そもそも

うらぼん

ごう

みなもと

もくれんそんじや

はは

しょうだいによ

もう

ひと

盂蘭盆と申すは、源、目連尊者の母・青提女と申す人、

けんどん

ごう

み

じ

ごひやくしょうが

きどう

はは

たま

そうろう

もうれん

ひと

もくれん

慳貪の業によりて五百生餓鬼道におち給いて候を、目連

すく

こと お

そうろう

ほとけ

救いしより、事起こりて候。しかりといえども、仏には

成

ゆえ

わ

み

ほけきょう

ぎょうじや

ゆえ

なさず。その故は、我が身いまだ法華経の行者ならざる故

に、母をも仏になすことなし。靈山八箇年の座席にして、
法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱えて多摩羅跋栴檀香仏と
なり給い、この時、母も仏になり給う。

また施餓鬼のこと仰せ候。法華經第三に云わく「飢え
たる國より來つて、たちまちに大王の膳に遇うが」とし
云々。この文は、中根の四大声聞、醍醐の珍膳をおとに
もきかざりしが、今經に來つて始めて醍醐の味をあくまで
になめて、昔うえたる心をたちまちにやめしことを説き
給う文なり。もししからば、餓鬼供養の時は、この文を誦し

なんみょうほうれんげきょう とな 弔 たも そうちうう
て、南無妙法蓮華経と唱えてとぶらい給うべく候。その
総じて、餓鬼において三十六種類相わかれて候。その
中に護身餓鬼と申すは、目と口となき餓鬼にて候。これ
はいかなる修因ぞと申すに、この世にて夜討ち・強盜など
をなして候によりて候。食吐餓鬼と申すは、人の口よ
りはき出だす物を食し候。これも修因、上のごとし。ま
た人の食をうばうにより候。食水餓鬼といは、父母孝養
のために手向くる水などを呑む餓鬼なり。有財餓鬼と申す
は、馬のひづめの水をのむがきなり。これは今生にて財を
うま 蹄 みづ 餓鬼 こんじょう たから

惜 じき 隠 ゆえ むざい もう う
おしみ食をかくす故なり。無財がきと申すは、生まれてより以来、飲食の名をもきかざるがきなり。

このかた

おんじき な

聞

餓鬼

じきほう もう しゅつけ ふっぽう ひろ ひと われ ほう
と ひとそんけい ひと おも みょうもんみょうり ここる しうじょう
食法がきと申すは、出家となりて仏法を弘むる人、我は法を説けば人尊敬するなんど思いて、名聞名利の心をもつて人にすぐれんと思つて今生をわたり、衆生をたすけず、父母をすぐるべき心もなき人を、食法がきとて法をくらうがきと申すなり。

餓鬼 もう

とうせい そう み

ひと ひと

われいちん

くよう くよう み

受

ひと
当世の僧を見るに、人にかくして我一人ばかり供養をうくる人もあり。これは「狗犬の僧」と涅槃經に見えたり。

くけん そう

み

これは未来には牛頭という鬼となるべし。また人にしらせ
て供養をうくるとも、欲心に住して人に施すことなき人
もあり。これは未来には馬頭という鬼となり候。また在家
の人々も、我が父母、地獄・餓鬼・畜生におちて苦患をう
くるをばとぶらわずして、我が心に任せたのしむ人をば、
いかに父母のうらやましく恨み給うらん。僧の中にも
父母・師匠の命日をとぶらう人はまれなり。定めて、天の
日月、地の地神、いかりいきどおり給いて、不孝の者とおも
にちがつ ち ちじん 怒 憤 たま ふこう もの 思

わせ給うらん。形は人にして畜生のごとし。人頭鹿とも申すべきなり。

にちれん

じょうしょう

みらい

みらい

りょうぜんじょうど

詔

おんゆえ

日蓮、この業障をけしはてて未来は靈山淨土にまいるべ

思

しゅじゅ

だいなんあめ

降

くも

湧

しとおもえば、種々の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき

そうちら

ほけきよう

おんゆえ

く

く

候えども、法華経の御故なれば、苦をも苦ともおもわず。

にちれん

でしだんな

たも

ひとびと

こと

こんげつじゅうににち

かかる日蓮が弟子檀那となり給う人々、殊に今月十二日の

みようほうしようりょう

ほけきよう

きょううじや

にちれん

だんな

妙法聖靈は法華経の行者なり、日蓮が檀那なり、いか

がきどう

墮たも

さだ

にちれん

だんな

でか餓鬼道におち給うべきや、定めて釈迦・多宝仏・十方の

しょぶつごほうぜん

はははは

はははは

諸仏の御宝前にましまさん。「これこそ四条金吾殿の母よ母

どうしん

こうべ

よろこ

褒

たも

よ」と、同心に頭をなで、悦びほめ給うらめ。「あわれ、

こ
われ

しゃかぶつ

語

たも

いみじき子を我はもちたり」と釈迦仏とかたらせ給うらん。

ほけきょう

い

ぜんなんし

ぜんによにんあ

みようほけきょう

法華経に云わく「もし善男子・善女人有つて、妙法華経の

だいばだつたほん

き

じょうしん

しんぎょう

ぎわく

しよう

提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑を生ぜずん

じごく

がき

ちくしょう

お

じっぽう

ぶつぜん

しよう

ば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、十方の仏前に生ぜ

しよう

とこる

つね

きょう

き

ん。生ずるとの処にて、常にこの経を聞かん。もし

にんてん

なか

しょう

しようみよう

らく

う

きょうもん

あ

人天の中に生ぜば、勝妙の樂を受け、もし仏前に在らば、

れんげ

けしよう

うんぬん

きょうもん

ぜんによにん

み

蓮華に化生せん」と云々。この経文に「善女人」と見えた

みようほうしょうりよう

た

り。妙法聖靈のことあらずんば誰がことにやあらん。

い

きょうう

たも

がた

たも

われ すなわ かんぎ しょぶつ ほ うんぬん にちれんさんだん ひと

また云わく「この經は持ち難し。もししばらくも持たば、
我は即ち歡喜す。諸仏もまたしかなり。かくのどときの人は、
諸仏の歎めたもうところなり」云々。日蓮讚歎したてまつる

ことはもののかずならず。「諸仏の歎めたもうところなり」
と見えたり。あらたのもしや、あらたのもしやと、信心をふか
み 頼

くとり給うべし、信心をふかくとり給うべし。
なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう きょうきょうきんげん
南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。恐々謹言。
しちがつじゅうににち にちれん かおう

七月十二日

日蓮 花押

しじょうきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事